第49回「てのひら文庫賞」読書感想文全国コンクール
文部科学大臣賞　作品

文部科学大臣賞

5年自由図書部門／読んだ本・ぼくは満員電車で原爆を浴びた

「ぼくは満員電車で原爆を浴びた」を読んで

兵庫県神戸市立花谷小学校　髙橋怜

私がこの本を選んだ理由は母に戦争の本にして欲しいと言われた事です。一年に一度は戦争の事について考えてほしいと言われて戦争の本を探しているときに表紙にのっていた電車のような乗り物が骨組みだけで、なぜこのようになったのか疑問に思ったからです。

この本は当時小学5年生だった鉄志が主人公。八月六日広島に原子爆弾が落とされた日に鉄志は広島市内の祖父母の家に行った。その時に満員電車に乗り、電車内被爆した。その後の後遺症がひどかったが奇跡的に回復し、母は27日後に死んだ、という実話です。

この本を読んで私が心に残った場面は、二つあります。一つ目は電車内被爆して逃げる時に救援トラックの荷台に乗った時の場面です。鉄志と母が乗った救援トラックの荷台には大怪我をしている人でいっぱいで、その中でもびっくりしたのが折れた骨がひふも筋肉も突き破って外に飛び出している人や目玉が取れて頬の所で目玉が垂れ下がったりした人もいたという事です。その様な事は日常生活の中で目にしたこともなく、本当にそんな事があったのかと疑うほどで、頭を殴られたように衝撃とショックが波のように押し寄せて辛い気持ちになりました。

二つ目は鉄志が40度もある熱が続いて、苦しんでいる時に台所へ行って「もう死んだほうがましや。はよ死にたい」とさけび包丁をのどにさそうとした場面です。それを読んだ時とてもびっくりして思わず文を二度読み返しました。死んだ方がましなんて考えた事もなくて、私だったら楽しいことをたくさんしたいから生きたいと思います。しかし鉄志は「死んだほうがまし」と言っているので、そのくらいしんどくて生きる事すらも辛かったのだと思います。私が熱が出た時早く良くなったら良いなと軽く考えるだけで、死にたいなんて思いもしませんでした。それに今は戦争もなく医療も発展し良くきく薬を飲むことも出来ます。しかし鉄志の時にはそんなものはとても貴重だったためもう鉄志は治らないと思われ、何もする事ができなかったのです。鉄志は奇跡的に助かりましたが他の人はそうはいかず鉄志のように自ら命を捨てたりして亡くなっていった人が多くいたのです。なぜ罪の無い人々が命を捨てるぐらい苦しんでいるのに戦争をやるのか意味が分からなくてとても腹が立ちます。

私はこの本を読んで想像以上に戦争がひどいものだという事に驚くと同時に腹が立ちました。戦争を始める事によって罪のない人達が日常の生活をこわされ、悲しい思いや辛い思いをしたという事が分かったからです。私は今年の夏、広島原爆資料館に行きました。そこには現実ではありえないような写真や展示物があり背中に重たいものが乗っているようなしずんだ重い気分でした。その日被爆者の方の講話を聞く事ができました。その方は才木幹夫さんといい13歳の時、爆心地から2.2km離れた自宅で外出しようとした時被爆しました。才木さんの話を聞き一番心に残ったのが同じ学校にいたたくさんの生徒たちが亡くなる中自分は生き延びた後ろめたさを感じて93歳になった今でも生きていて良かったと思えないという事です。生きていて良かったと思えないほど戦争は亡くなった方も含めたくさんの人の人生をぐちゃぐちゃにしてしまうものだと実感しました。戦争は絶対にやってはいけない、八月六日の時の悲劇を二度と起こしてはいけないと改めて強く感じました。この本を見た人が戦争は絶対にやってはいけない恐ろしいものだと伝わってほしいです。そして広島原爆の悲劇が忘れられないように人々は戦争を知っていかないといけません。平和は目に見えませんが戦争は見える。しかし戦争もいずれは忘れられて見えなくなる、そんな時が来ないように私たちは現実から目をそらしてはいけないのだと思います。

※無断での転用・転載を禁じます。